第５課　預言者の叫び

【暗唱聖句】

「人よ、何が善であり主が何をお前に求めておられるかは、お前に告げられている。正義を行い、慈しみを愛し、へりくだって神と共に歩むこと、これである」ミカ6：8

【日曜日・繰り返される正義への呼びかけ】

イスラエルの人々は他国のように王を要求しました。それに対して預言者サムエルは、主の言葉を伝えます。

「あなたたちは王の奴隷となる。その日あなたたちは、自分が選んだ王のゆえに、泣き叫ぶ。しかし、主はその日、あなたたちに答えてはくださらない。」サムエル上8：17，18

神様が彼らの王であり、正しい導き手なのです。神様の言葉を代弁し導くために士師や預言者たちが与えられました。その言葉に従えば、十分に間違うことのない正しい道を歩むことができ、神様の栄光が現わされる素晴らしい人生を送ることができるのでした。しかし、王を立てるならば、他国と同様に王の奴隷になってしまうことを神様はご存じでした。王を正しく導くために神様は預言者を何人も遣わしましたが、ソロモンやダビデでさえ、その導きに逆らい、誘惑や腐敗、過剰な権力におぼれてしまうことがしばしばだったのです。神様は預言者たちを通して、王たちに神様のみ旨を語りました。預言者は様々な人たちがいましたが、どの預言者たちも常に、神様の正義と公平をなすようにと語りました。正義への呼びかけが何度も繰り返されたのは、その神様のみ旨が往々にして無視され、ぞっとするような悪がなされたからでした。預言者たちは悪が平然となされるのを見て心を震わせ、ヒステリックとも思えるような声でそれを断罪しました。そのことを思うとき、現代社会の恐ろしさを思わされます。聖書時代と同じような、あるいはさらに恐ろしいことが行われていても、多くの人が何とも感じなくなっています。もしいま、聖書時代の預言者が登場したなら、彼らはいったい何を語るでしょうか。

【月曜日・アモス】

アモスは、「わたしは預言者ではない。預言者の弟子でもない。わたしは家畜を飼い、いちじく桑を栽培する者だ。主は家畜の群れを追っているところから、わたしを取り、『行って、わが民イスラエルに預言せよ』と言われた」（アモス7：14，15）と述べています。神様に用いられるとは、自分の意志に関係がなく、才能も関係がありません。アモスの召しを見るとそのことがよくわかります。ただ、アモスは聞き手をひきつける能力があったようです。そして歯に衣を着せず、ストレートに神様の言葉を語りました。

　アモスは北イスラエルにおいて、初めシリアやペリシテなどの周辺諸国における罪を指摘します。次に北イスラエルの隣人である南のユダの人々に対する神様の裁きを宣言します。そして、最後に聴衆のほうを向き、イスラエルの悪、偶像崇拝、不正行為などを指摘します。

　「サマリアの山に集まりそこに起こっている狂乱と圧政を見よ。彼らは正しくふるまうことを知らないと主は言われる。彼らは不法と乱暴を城郭に積み重ねている」アモス3：9～10。

＊神様は外国で行われている不法をしっかり見ています。

「まことに、主はイスラエルの家にこう言われる。わたしを求めよ、そして生きよ…さもないと主は火のようにヨセフの家に襲いかかり、火が燃え盛ってもベテルのためにその火を消す者はない」アモス書5章 4～6節

＊イスラエルの人々も主を求め正しい道を生きなければ、神の民といえども主の怒りが臨むことを教えています。

「このことを聞け。貧しい者を踏みつけ苦しむ農民を押さえつける者たちよ。主はヤコブの誇りにかけて誓われる。「わたしは、彼らが行ったすべてのことをいつまでも忘れない。」アモス8：4～7

＊神様は特に、弱者を顧みないことをけん責しています。

【火曜日・ミカ】

預言者ミカは、イザヤとほぼ同じ時期の紀元前8世紀に活躍した預言者の一人で、主に出身地モレシェトの人々が圧政に苦しんでいる人々のために預言を行っていきました。

「昨日までわが民であった者が敵となって立ち上がる。平和な者から彼らは衣服をはぎ取る。戦いを避け、安らかに過ぎ行こうとする者から。」ミカ書2章 8節

貧しいながらも平和に暮らしていた人々が、同胞たちから搾取され、酷い目に合わされています。それに対してミカは激しく、「わたしは力と主の霊、正義と勇気に満ち、ヤコブに咎をイスラエルに罪を告げる」（ミカ書3章 8節）と預言します。しかし、神様は民を見捨てられたわけではなく、正しい道に立ち帰るように語ります。

「人よ、何が善であり主が何をお前に求めておられるかは、お前に告げられている。正義を行い、慈しみを愛し、へりくだって神と共に歩むこと、これである」ミカ6：8

神様が求めていることは、正義を行うこと、そして慈しみを愛することです。不正を行うのは問題外ですが、正義を追い求めるあまり、慈しみや憐れみの心を失うのも間違いです。正義と慈しみを両立させるには、神様の心を知る必要があります。そのためには、へりくだって神様と共に歩むことが大切なのです。

【水曜日・エゼキエル】

エゼキエルはバビロン捕囚によってケバル河畔の難民社会に強制移送された預言者です。彼はそこで、なぜ自分たちの国は滅ぼされたのか、神様からの言葉を語っていきます。

「それゆえ、主なる神はこう言われる、あなたはわたしを忘れ、わたしをあなたのうしろに捨て去ったゆえ、あなたは自分の淫乱と淫行との罪を負わねばならぬ」（エゼキエル書23:35)

ユダヤ人たちが神様から見捨てられたのではなく、ユダヤ人たちが神様を見捨てたのだと言います。さらに、

「お前の妹ソドムの罪はこれである。彼女とその娘たちは高慢で、食物に飽き安かんと暮らしていながら、貧しい者、乏しい者を助けようとしなかった」（エゼキエル書 16章49節）と、飽き足りるほど食べながら貧しい人を助けなかったことを断罪しています。しかし、エゼキエルの焦点は現実の問題を直視させつつも、神様の回復の約束へと向けられていきます。

「まことに、主なる神はこう言われる。見よ、わたしは自ら自分の群れを探し出し、彼らの世話をする」エゼキエル書34章11節

牧者として立てられている者たちは、自分のことしか考えません。そこで神様は自ら自分の羊の群れを探し出し、世話をすると言われました。今もなお、神様はご自分の羊を探しておられます。そして世話をすることを望んでおられます。神様から見出される人もいるでしょう。また自分から主のもとに帰っていくのも良いでしょう。いずれにしても、神様との正しい関係の中で生きることが大切です。

【木曜日・イザヤ】

ユダ王国後期に活躍したイザヤは、ユダの不正を糾弾し、バビロンへの流刑を警告しながら、同時にメシヤの到来を告げています。

「悪い行いをわたしの目の前から取り除け。悪を行うことをやめ 善を行うことを学び、裁きをどこまでも実行して搾取する者を懲らし、孤児の権利を守り、やもめの訴えを弁護せよ」イザヤ1：16，17

イザヤも孤児ややもめなどの弱者を助けるようにと訴えています。神様の目は常に弱者に向けられていることがわかります。イザヤは神様の言葉を代弁しながら、弱者が守られるように訴えます。しかし現実は、「支配者らは無慈悲で盗人の仲間となり皆、賄賂を喜び、贈り物を強要する。孤児の権利は守られず、やもめの訴えは取り上げられない」（イザヤ1：23）のでした。神様が救い主を世に遣わされるのは、これら傷ついた弱者を救い出すためでもありました。そして、悪行を行っている人々に対して、その罪深い行いを悔い改め、神様に立ち帰るようにと訴えます。さもなくば、国が崩壊するレベルの裁きが速やかに臨むのでした。